

啓蒙のオルタナティブな定義

— 普遍主義と多元主義、ラディカルとモデレートの間 —

壽里 竜 (慶應義塾大学)

1. イスラエルの二分法的思考・発想

・ ポーコックの『マキアヴェリアン・モーメント』もそうだが、明確なビジョンには必ず欠点も伴う。とりわけ思想史研究においては、そのパースペクティブを採用することで新たに見えてくるものの幅と奥行きが重要。

→イスラエルのテーゼは、必ずしも“revisionist”ではなく、むしろ先祖返り atavism。

→たとえばポーコックが「徳の言語と権利の言語は両立しない」と主張するのに対して、両者の両立を説く言説もある（出てくる）ように、ラディカル／モデレートの境界はつねに曖昧にならざるを得ない。イスラエルの場合、スピノザ主義という内容と同時に、ラディカル／モデレートという程度でも分けているので、この点がさらに問題となる（この程度の違いとスピノザ主義との因果関係については以下3、4で触れる）。

・ 問題とすべきは、そのテーゼの瑕疵よりも、彼の一貫した二分法的思考：新たな思想の既存秩序に対する態度が、なぜ「変革／妥協」の二つしか存在しないとイスラエルは考えるのか。

・ この思考法は、自らの研究に対する批判（者）にも向けられる。“To be confronted simultaneously with four lengthy, mostly critical reviews severely questioning a line of research and argument that has occupied over twenty years of one’s life is a deeply sobering experience” (Israel, 2014, p. 77). 批判者たちを“the burgeoning ‘juggernaut’ of critical literature” (p. 86)と呼んでいる。JHIの特集でも、彼は論敵をpositive / negative criticsに分類 (Israel, 2017, p. 649)。

・ “His [Israel’s] response to his critics in *H-France* is really a non-response.” “Restating one’s position is not a response” (Rosenblatt, pp. 634, 635).

2. 啓蒙のオルタナティブな定義 (Susato 2015: Chap. 1)

・ 啓蒙を「プロジェクト」とする言説そのものの歴史性：マッキンタイアの『美徳なき時代』（1981年）が端緒と言われる→その背景にあるのがハーバーマスの講演「未完のプロジェクトとしての近代」（1980年）

・ 歴史概念としての「啓蒙思想」：「啓蒙の単数性・複数性」（ポーコック）という問題設定に対して、「場」としての啓蒙→社会構造の変化（とりわけ宗教的信念の動揺）という歴史認識（単数）／それに対する評価（複数）

- ・Radical/Moderate/Counter-Enlightenment(s)+それ以外の様々な型 (Catholic Enlightenmentなども) を包摂する歴史的な場としての「啓蒙」 (パラメーターは無数)
- ・懐疑主義と啓蒙思想...ローティによるヒューム評価 (非基礎付け主義的な近代の可能性) →モダンとポストモダンを架橋する可能性

3. ラディカルとモデレートとの区分について

- ・「1792年にファーガソンはこう述べている。イギリス型の混合政体と、革命によって成立したばかりの共和主義的な民主政とのあいだで選択を迫られたとしても、どちらがより優れているか判断するのはたやすい。「一方の体制のもとでは、人間の身体および所有物の安全は確保され、人びとの才能も開花する」が、もう一方の体制下 (つまりフランス) では、「混乱と他者への攻撃と不正とが蔓延し、人間の才能はいずれも墮落し、あるいは抑圧されるのを目にすることになる」⁽¹⁴⁾。ここで彼は、リチャード・プライス、ジョゼフ・プリーストリー、ジョン・ジェブ、ウィリアム・フレンド、ウィリアム・ゴドウィン、メアリ・ウルストンクラフト、そして下層階級の出身で、溢れんばかりの情熱を持つ独学者トマス・ペインなど、イングランドの急進的啓蒙の思想潮流に属する著述家たちとはっきりと一線を画している」 (Israel 2009, p. 10, 邦訳19-20ページ)。
- ・「『道徳・政治科学の諸原理』 (1792年) の末尾で、ファーガソンは自分が断固拒否する急進的なタイプの啓蒙と、みずからが支持する種類の啓蒙、つまり経験によって基礎づけられた穏健な方法を選ぶ啓蒙との違いを要約している。後者は、チュルゴ、ヴォルテール、そして啓蒙に関与したほとんどのイギリス人、アメリカ人が擁護したものだが、ファーガソンによるこの要約は印象的である⁽²²⁾。ファーガソンが嫌悪する急進的な考え方… (略) …とは、デイドロ、ドルバック、クロード＝アドリアン・エルヴェシウス、コンドルセ侯爵、そしてペイン、ジェブ、ジョエル・バーロウ、ロバート・コラムといったイギリスおよびアメリカの急進派たちの思想を指す」 (Israel 2009, pp. 16-17, 邦訳25ページ)。

→注14には「Ferguson, *Principles*, 2: 499」、注22には「Ferguson, *Principles*, 2: 496-97」と記されているが、この箇所 (Part II, Chap. VI, Sec. XI “Of National Felicity”) にも、この本 (二巻本) の中にも、デイドロ、ドルバック、エルヴェシウス、コンドルセ、ペイン、ジェブ、バーロウ、コラムらの名前は一箇所も出てこない。ファーガソンがこれらの思想家たちを念頭に置いていた可能性は十分にあるが、だからといって上記以外の思想家たち (ルソーやヒューム) をそこに含んでいなかったとは言えない。

- ・「ある書き手が二人の思想家を俎上にのせて比較する際、一方の思想家を特に引き合いに出したり、描写したりする場合には、書き手が自分自身の目で見ているか、それとももう一方の思想家の目を通して他方の思想家を見ているかというのは、必ずしも定かではない。…結局のところ、これが非常に重要な点になってくる」(Forbes 2001, pp. 108–09, 邦訳22ページ)。
- ・「ずっと以前からイギリスでも、プライスやプリーストリに加え、ペイン、ゴドウィン、ベンサム、そして彼らの影響を受けた人びとが、同じように代議制民主主義を強く要求していた」(Israel 2009, p. 69, 邦訳72ページ) →なぜスピノザ主義が代議制支持に結びつくのか(ましてやイングランドの文脈において)が説明されていない (Israel, *Democratic Enlightenment*, 2011の索引には、democracyの中にrepresentative democracyの項目があるが、該当箇所を見ても本書の説明以上のものはない)。
- ・一部の思想家たちからは、ヒュームの懐疑主義もラディカルと受け取られていた (Susato 2015: Chap. 8) し、ヒュームの「完全な共和国に関する一案」はプライス、ペイン、ゴドウィン、ウルストンクラフトらによって好意的に引用・言及されていた (Susato 2016)。プライスはフランスの1791年憲法で採用された二段階選挙がヒュームによって最初に示唆されたと指摘している。

4. スピノザ主義と急進的啓蒙の関係について

- ・イスラエルの一連の研究をスピノザとスピノザ主義の思想史として評価すべき? → 「スピノザ主義啓蒙 Spinozist Enlightenment」として見れば、思想史研究として重要な貢献ではあるが、Radical/Moderateの区分の論争になってしまっている。ただし、その場合でも、スピノザ主義という内実が急進的啓蒙という帰結にどれほど(排他的にexclusively)直結するののかという問題は残る。①急進主義を産んだのはスピノザ主義だけなのか?(森村, 2017, 238ページ) ②「急進主義にならないスピノザ主義」はあるのか? という二点が問われるべき。この二点を問わなければ、現代からの読み込み・跡づけになってしまう。
- ・「ペインは普遍的な人権という観点から議論を行っているのであり、イギリス人の自由を論じているのではない。…そこにはスピノザとフランスの急進派フィロゾフたちの影響がはっきりとみてとれる loudly echoing Spinoza and the French *philosophes*。ペインが直接、彼らの著作に感化されたわけではおそくないだろうが、彼はみずからの知的源泉を明らかにすることがほとんどないため、確かなことはわからない no one knows exactly。しかし、いずれにせよ、ペインのつぎの文章が示すように、自然権に関する両者の議論の内容はきわめて近く、同じレトリックを用いていることは明

白である But the affinities and rhetoric of natural rights are, in any case, striking」 (Israel 2009, pp. 237–8, 訳書230ページ)。

Bibliography:

- Chisick, Harvey (2014) “Review Essay,” *H-France Forum* 9: 1, pp. 57–76.
- Ferguson, Adam (1795) *Principles of Moral and Political Science* [...], 2 vols, Edinburgh: W. Creech.
- Forbes, Duncan (2001), “Aesthetic Thoughts on doing the History of Ideas,” *History of European Ideas* 27: 2, pp. 101–13. 吉田朋正訳「思想史という営みの感性的側面について」『思想』2017年第5号、No. 1117、10–30ページ。
- Israel, Jonathan (2009) *A Revolution of the Mind: Radical Enlightenment and the Intellectual Origins of Modern Democracy*, Princeton: Princeton University Press. 森村敏己訳『精神の革命：急進的啓蒙と近代民主主義の知的起源』2017年、みすず書房。
- Israel, Jonathan (2014) “A Reply to Four Critics,” *H-France Forum* 9: 1, pp. 77–97.
- Israel, Jonathan (2016) “Rousseau, Diderot, and the ‘Radical Enlightenment’: a Reply to Helena Rosenblatt and Joanna Stalnaker,” *Journal of the History of Ideas* 77:4, pp. 649–677.
- 森村敏己(2017)「訳者解題」『精神の革命：急進的啓蒙と近代民主主義の知的起源』2017年、みすず書房。
- Rosenblatt, Helena (2016) “Rousseau, the ‘Traditionalist’,” *Journal of the History of Ideas* 77:4, pp. 627–635.
- Susato, Ryu (2015) *Hume’s Sceptical Enlightenment*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Susato, Ryu (2016) “Hume as an ami de la liberté: the Reception of His ‘Idea of a Perfect Commonwealth’,” *Modern Intellectual History* 13:3, pp. 569–596.